



## 再び戦争への道を進んではならない 「ナチス」は民主主義の制度下で生まれた

草の家 副館長 玉置啓子

戦争亡者が大手を振って、日本中を跋扈<sup>はっこ</sup>している。

戦争亡者には、古い者もいれば、新しく亡者になった者もある。古い亡者は、三年半前の挫折を「反省」し、「日本を取り戻す」と叫んでいる。どういう日本を取り戻すのか。よく聞いていると、どうもあの忌まわしい第二次世界大戦以前の日本のようである。

彼らは憲法を「改正」して、天皇を元首にし、自衛隊を国防軍にし、米軍と共同して集団的自衛権行使することを可能にし、「国家安全保障基本法」を制定するという。核武装も必要という。新しい戦争亡者も負けじと核武装必要論を唱えている。

戦争亡者達は、人々の貧困と社会の閉塞感を「栄養」にして生まれ、力をつけてきた。しかも、日本社会の貧困化と、グローバリゼーションによる希望の無い世の中を作ってきたのは巨大企業であり、他にもない彼らは戦争亡者達の雇い主なのである。

巨大企業は世界展開を目指して、利益と利益の衝突を生みながら、勝ち組と負け組の仕分けをしていく。その手段に武力行使もいとわないのは昔も今も変わらない。原発は彼らにとって金のなる樹であり、核兵器のできる樹であるから、脱原発はあり得ない。

ところで、今の時代はドイツでナチスが台頭した時に似ているという指摘が、識者からなされている。

第一次大戦後、ドイツでは帝政が終焉し、史上初めて、ワイマールという議会主義的共和制国家が生まれたが、この共和国は短命に終わった。それはなぜか。『ナチスの国の過去と現在 ドイツの鏡に映る日本』（望田幸男著 / 新日本出版社）という著書のなかで、ワイマールは「誰からも愛されなかった民主主義」と表現されている。その背景には、大戦後の膨大な賠償金と、世界恐慌による極度の経済危機、社会の閉塞感、帝政時代からの官僚と軍部が新政権を支えていたこと、多党政治（時には 30 近くの政党があったという）による政局不安の慢性化などの要因があったことが述べられている。そして、ワイマールは内部崩壊状態となり、1932 年、ナチスがワイマール憲法下の比例代表選挙制度に基づく合法的方法によって第 1 党となり、ヒトラーが首相になった。望田氏は、ナチスは「右」からの現状変革の運動を起こしたと指摘している。

私たちは、平和で、人間らしい世の中を求めて、現状を変革したいと望んでいるのであって、戦争亡者に連れられて、新たな愚かな戦争の時代へ進んではいけない。